

御室仁清窯跡出土陶片の基礎的研究 — 茶入 —

尾野善裕・佐藤隆
平尾政幸・畑中英二

はじめに

よく知られているように、江戸時代前期の京焼を代表する名工として著名な野々村仁清の窯は、御室の仁和寺門前にあった。「仁清」印が捺された陶片が多数出土したこともあって、この御室窯跡の存在は早くから陶磁器研究者の注目を集めており、大正四年（一九一五）十一月には現地を踏査した真清水蔵六（二代）らによって、「陶工仁清窯址」と彫られた石標も建てられている（挿図1）。

正式に発掘調査が行われたことはないものの、家屋の建築や庭園造成工事などに際して少なからざる量の陶片が採集されており、元の土地所有者であった奥村家から、昭和二十五年（一九五〇）に東京国立博物館が購入した二二〇片（以下、東博陶片）については、既にその全容が公表されている^①。しかし、平成十九年に京都国立博物館が購入した九〇〇片を超える陶片（以下、京博陶片）の中には、東博陶片の中には認められない要素も散見され、整理作業を通して野々村仁清の作陶（御室焼の生産）を考える上での新たな知見を得

ることができた。そこで、今後の仁清研究の一助とすべくこの京博陶片を紹介すると同時に、関連する問題について論じようというのが本稿の趣旨である。

もともと、京博陶片の整理作業はまだその緒に就いたばかりであり、完遂までにはかなりの時間を要する見込みであるため、今回は茶入に限って紹介することとし、他器種については整理が終了次第、逐次報告してゆくこととしたい。



挿図1 「陶工仁清窯址」石標

なお、本稿は平成21年度に西田記念東洋陶磁史研究助成を受けた『京焼の成立と展開に関する技術系諸論を中心とした考古学研究』ならびに平成22・23年度科学研究費補助金助成研究『京焼をはじめとする関西陶磁技術の成立と展開に関する美術工芸史・考古学の総合的研究』（いずれも研究代表は佐藤隆）による調査成果の一部である。文責は、基本的に執筆者である尾野が負うものであるが、基本的知見（表1～3）については佐藤・平尾・畑中・尾野の4名の共同作業として適宜分担して実施した調査成果に基づいている。

一 京博陶片の中の茶入

京博陶片は、古美術商からの購入品であるが、元々は仁和寺門前に在住の森奥安吉氏が京都市右京区御室堅町15番地一帯で住宅建設が行われた際に採集されたものである。³⁾ 接合できるものをまとめて一片として数えるとなると、茶入と目される陶片は全部で三五片（接合前破片数は三六）あり、形態にも胎土にもかなりの多様性が認められる（図16・17、挿図1、表1）。

全形を復元できないものばかりであるため、判断できないものも少なくないが、伝統的な茶入の呼称に従うならば、1が丸壺もしくは驢蹄口、2が円座、9・12・20・22・29・33が肩衝、13が飯胴もしくは皆口、21が瓢箪、24が耳付に分類されよう。また、断定は憚られるものの、その独特の胴部の形状からみて、17は手瓶かと思われる。

焼締陶器である27と、施釉前の素焼陶片である31を除くと、基本的にはいずれも鉄釉が施されている。ただし、漆黒色から灰黄褐色

まで発色には幅があり、6・10・13・22・25のように部分的に灰釉を重ね掛けして景色としたものや、14のように鉄釉と灰釉が掛け分けられているものも散見される。

胎土は、中間的な特徴を示すものが少なく、単純な類型化にはいささか問題があるかもしれないが、粒子の粗密や色調の濃淡などを目安として、ここでは次の八類型に区分しておく。

A群（1～4）非常に緻密で、鉄分を多く含んでいるらしく褐灰色～赤灰色を呈する。器表面と断面で色調は若干異なっているが、基本的には単味の土で、特に異なる土を混ぜ合わせているようには見受けられない。一見、中国製の唐物茶入を思わせる質感を呈する。

B群（5～8）A群と同様に、鉄分を多く含んでいるらしく褐灰色～ぶい褐色を呈するが、異なる色の土を混ぜ合わせて調整しているように見受けられ、A群と較べて粒子がやや粗い。

C群（9～19）A・B群と較べると明るい、後述のG・H群よりはやや鉄分が多いようで、黄灰色がかった色調を呈する。A群と同様に単味の土と思しく、比較的緻密な胎土であるが、A群には及ばない。

D群（20～27）C群に類した黄灰色気味の色調を呈するが、異なる色の土を混ぜ合わせて調整しているように見受けられる。B群と同様にやや粗い胎土である。

E群（28）C・D群よりも明るい、後述のG・H群と較べるとやや鉄分が多いらしく、淡黄色気味の色調を呈する。A群と同様に単味の土と思しいが、茶入の胎土としてはやや粗い。

F群（29）鉄分を多く含んでいるらしく断面は褐灰色であるが、

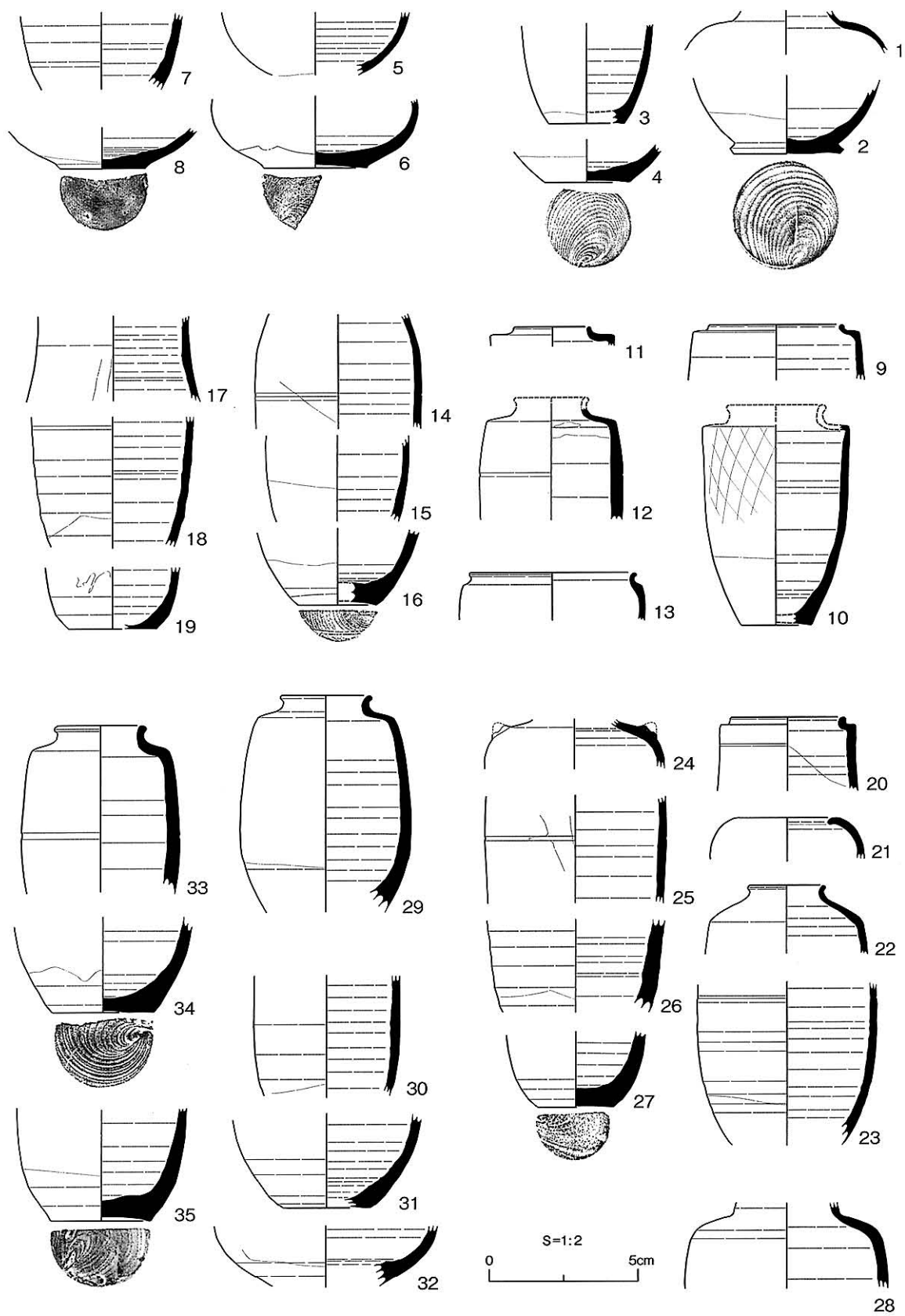


插图2 御室仁清窯跡出土茶入陶片（京博陶片）实测图

器表面はにぶい黄橙色を呈する。石英の粒子が目立つ粗い胎土で、異なる色の土を混ぜ合わせて調整しているように見受けられる。

G群(30~32) 比較的緻密な胎土で、鉄分の少ない白っぽい色調を呈しており、特に異なる色合いの土を混ぜ合わせてはいないように見受けられる。

H群(32~34) G群と同様に鉄分が少なく白っぽい色調を呈しており、やはり単味の土と見られるが、茶入の胎土としてはやや粗い。

二 胎土とロクロ回転の相関性

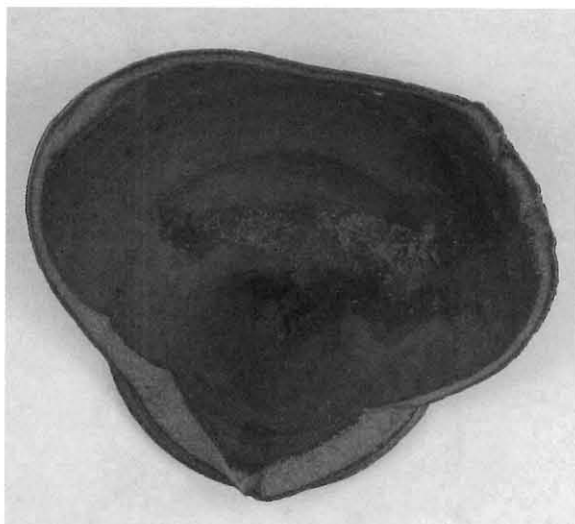
京博陶片の茶入の主要な形質的特徴については、概ね以上のようにまとめることができるが、調査に際して特に留意したのは、ロクロの回転方向の問題である。仁清の御室焼茶入に関

わるロクロ回転については、既に梶山博史氏による伝世品を対象とした研究があり、

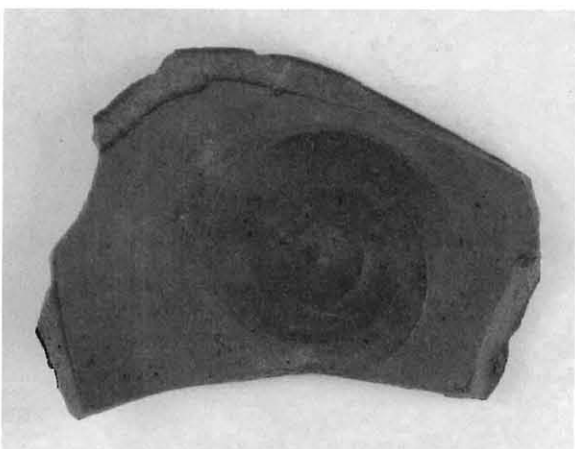
①基本的に成形(水挽き)は右回転(時計回り)であるが、底裏に残された糸切り痕には右回転と左回転の両者が混在していること

②右回転で成形(水挽き)しているにもかかわらず、左回転で糸切りされているものが存在する背景には、左回転のロクロで製作された中国製の唐物茶入を模倣しようとする強い意識が働いていることが指摘されている⁽⁴⁾。そこで、三五片のうち部分的に

でも底裏が残る一二片を調べたところ、小破片のため判断を保留せざるをえなかった一片(3)を除い



挿図3 左回転で成形(水挽き)されている茶入(京博陶片2)



挿図4 左回転で成形(水挽き)されている茶入(京博陶片4)

て、五片(2・4・6・8・16)が左回転、六片(10・19・27・31・34・35)が右回転で糸切りされていることが判明した。先述の胎土分類と照らし合わせてみると、胎土の色調が中間的なC群(9~19)には両者が共存するものの、見るからに和物茶入と判る白っぽい胎土のG・H群(30~35)には、右回転糸切りのものが集中する傾向をはっきりと認めることができる。これに対して、鉄分が多い胎土のA・B群(1~8)には左回転糸切りのものが集中しており、単に胎土の色調が似ているだけでなく、形態の上からも唐物写しと見なされるものばかりである。こうした事実を踏まえるならば、左回転糸切りの採用を唐物茶入模倣と捉える梶山氏の所説は、充分な説得力をもっていると評価されてよいだろう。

ところが、我々を驚かせると同時に困惑させましたのは、これま

で仁清の御室焼の中に存在するとは思われていなかった左回転で成形（水挽き）されている個体の存在である。具体的には2と4がそれに該当し、いずれも見込みに残されたロクロ目の渦巻から判断して、左回転で水挽き成形されていることは間違いない（挿図3・4）。

これまで仁清の御室焼茶入に関しては、瀬戸窯と同じ右回転成形（水挽き）であることが、輪ドチや匣鉢（サヤ）といった窯道具の使用と共に、尾形乾山の『陶工必用』に記された仁清の瀬戸における茶入製作修行伝承を裏付ける根拠とされてきた⁵⁾。しかし、左回転成形（水挽き）は前近代の瀬戸窯に存在の確認できない技法であり、これらの陶片の存在は、御室焼の成形技法の起源を瀬戸窯だけで説明することに疑問を投げかけずにおかないのである。

三 御室焼における左回転成形（水挽き）技法の存否

では、京博陶片の中に確認される左回転成形（水挽き）技法の存在は、どのように解釈すれば合理的に説明できるだろうか。この解釈を試みる前に、前提として解決しておかなければならない問題がある。それは、左回転成形（水挽き）と判断された二片（2・4）を含めて、図示した三五片のすべてを仁清の御室焼と見なしてよいかどうかという、極めて原則的な問題である。

碗類を中心に「仁清」在印陶片を多数含んでいることから、京博陶片の多くが仁清の御室窯で焼かれたものであることは、まず間違いない。しかし、正式の発掘調査による出土品ではない以上、前時代や後世の遺物が紛れ込んでいるのではないかという疑念は払拭できない⁶⁾、仮に御室窯操業時の遺物であったとしても、それだけで

御室窯の焼成品と断定はできない。なぜなら、本稿で紹介した三五片の茶入陶片の中に、「仁清」印が押されているものは僅か一片（35）⁷⁾しかなく、それ以外については作陶の手本として窯場へ持ち込まれた見本品が含まれているかもしれないことを、考慮しておく必要があるからである。

とりわけ、左回転成形（水挽き）であることが確実視される二片（2・4）⁸⁾が、いずれも底部をよく残しており、元々押印されていなかったとみられることは、これらが見本品として持ち込まれた唐物茶入そのものではないかという疑惑を抱かせる。その一方で、唐物茶入が茶の湯でどれほど珍重されてきたかを考慮するならば、破損したからとはいえ、安易に窯場に廃棄されるだろうかという疑問も湧いてこよう。

「仁清」印が捺されていない京博陶片だけでは、この問題を論ずることに限界があると考えられるので、上記問題意識に基づいて、京博陶片以外の御室窯跡出土品についても調査を行うこととした。具体的に調査対象としたのは、東博陶片二〇六片のほか、根津美術館所蔵の一六片（以下、根津陶片）、京都国立博物館に寄託されている蜷川第一氏採集の三六片（以下、蜷川陶片）である⁹⁾。

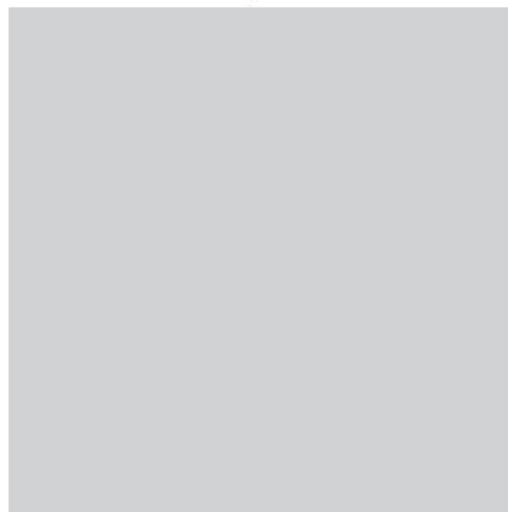
その結果、東博陶片には一九片、根津陶片には四片、蜷川陶片には四片の茶入が含まれていることが確認できたが、表2に示したように、京博陶片以外に左回転成形（水挽き）されている事例を見いだすことはできなかった。この事実、左回転成形（水挽き）されている2と4が、手本としての唐物茶入そのものである確率の高さを示しているかのようでもある。しかし、形状からみて2と4が同一個体ではありえない以上、いかに割れてしまったとはいえ、高価

な唐物茶入を二個体も捨てることについての疑問は、依然として残ってしまう。

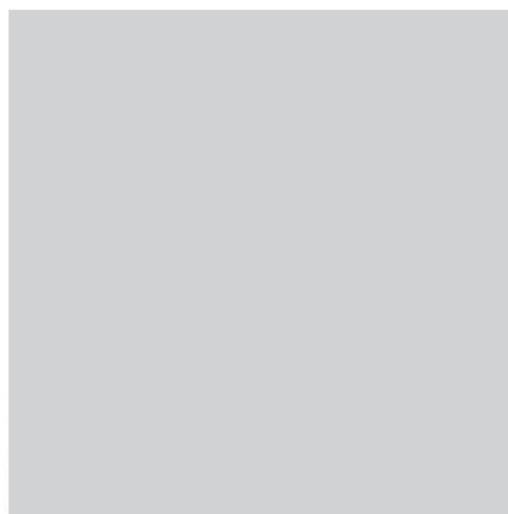
そこで、推論の信頼度を向上させるべく、御室窯跡出土陶片だけに限定するのではなく、伝世の御室焼茶入にまで調査対象を拡大することとした。ただし、世に伝わっている御室焼茶入を悉皆調査することは現実的ではないため、もし御室焼で左回転成形（水挽き）が部分的にでも行われているならば、その技法を採用している可能性が最も高いと思われる唐物写しの茶入に絞って、集中的に調査することとした。

御室焼の唐物写し茶入としては、根津美術館・泉屋博古館分館・静嘉堂文庫美術館に所蔵されている組茶入がよく知られた存在で、この三組だけで計四五個体にもなる。そこで、この四五個体について陶片と同様の調査を行ったところ、圧倒的多数が右回転成形（水挽き）・左回転系切りされている中に、僅か一個体だけではあるが、静嘉堂文庫美術館所蔵の鶴頸茶入（挿図5）が左回転成形（水挽き）されていることを確認した（表3）。

この茶入は、底裏に小型の「仁清」蒔形粹印（いわゆる蒔印）が捺されていることから、御室焼であることが確実な事例だが、見込みに残されているロクロ目の渦巻きは、この個体が左回転で成形（水挽き）されていることを明示している（挿図6）。つまり、ごく限定的ではあるかもしれないが、御室焼の中に左回転成形（水挽き）の技法は間違いなく存在しているのであり、京博陶片の2と4についても、ことさらに見本として持ち込まれた唐物茶入と考えなくても



挿図5 御室焼唐物写し鶴頸茶入（静嘉堂文庫美術館蔵）



挿図6 御室焼唐物写し鶴頸茶入（静嘉堂文庫美術館蔵）の見込み

よいことになる。

四 御室焼生産の技術系譜

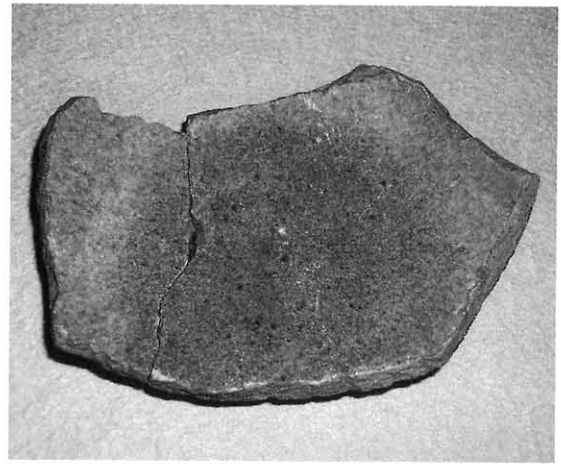
では、御室焼の中に左回転成形（水挽き）の技法が存在することは、どのように理解・評価されるべきだろうか。陶磁器を製作する際のロクロ回転方向の問題に関しては、日本・朝鮮半島から中国大陆までを視野に入れた津田武徳氏の先行研究があり、左回転の成形（水挽き）技法は中国大陆と薩摩・肥後（八代焼・小岱焼）といった九州南部や琉球（沖縄）地域に特徴的に分布することが指摘されている⁹。もっとも、朝鮮半島系の陶工によって開かれた上野・高取など北部九州の窯場でも、茶入に限っては左回転で成形（水挽き）されていることが知られているので、必ずしも技術系譜を中国大陆や九州南部・琉球にしか求めることができないわけではない。

したがって、茶入の事例だけで左回転成形（水挽き）の技術的起源を細かく絞り込むことは難しいのだが、これまでに筆者らが調査した範囲の中には、左回転で成形（水挽き）^⑪されている茶入以外の陶片は一点も見当たらなかった。つまり、御室焼では茶入に限って左回転成形（水挽き）技法が採用されている蓋然性が高く、そこには上野や高取など北部九州の窯場との共通性こそが見いだされるのである。

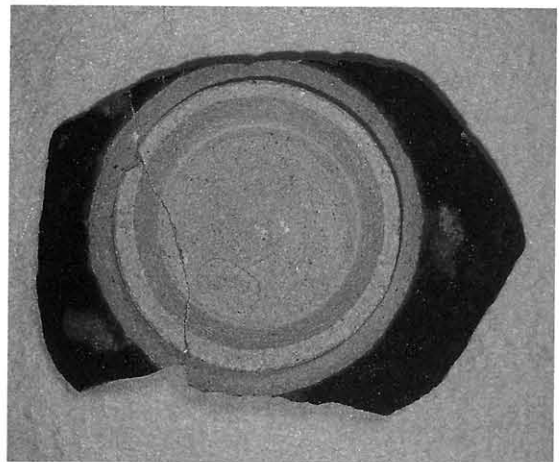
そこで、これら朝鮮半島系の窯場からの技術導入を想定しつつ、改めて御室窯跡出土陶片の全体を概観してみると、藁灰釉が施されている「仁清」在印陶片があることに気付く（挿図7・8）。藁灰釉の使用は、仁清と同時代以前の瀬戸焼や美濃焼には殆ど見受けられないが、唐津・上野・高取など北部九州では決して珍しくないから、茶入の左回転成形（水挽き）と共にこれら地域から導入された技法と考えることが可能である。

もっとも、左回転成形（水挽き）されているものは御室窯跡出土の茶入陶片の一割にも満たないし、藁灰釉が施されている陶片も格別多いというわけではない。したがって、御室焼の作陶技術の基本が瀬戸焼系であることが否定されるわけではなく、唐津・上野・高取などの北部九州の窯場から技術導入があったとしても、それは部分的・限定的であったと評価せざるをえないのである。

ただ、職人が一旦修得した水挽きのロクロ回転方向を変えることは、理論的にはありえても現実的ではないと思われるので、茶入の左回転成形（水挽き）が瀬戸系陶工による部分的な北部九州系技術



挿図7 藁灰釉が施された「仁清」在印陶片（京博陶片）



挿図8 藁灰釉が施された「仁清」在印陶片（京博陶片）の高台・印影

の修得であったとは考えにくい。むしろ、陶工・仁清の窯として知られる御室窯ではあるが、複数抱えていたであろう職人の中に、少数（おそらくは一人）北部九州の窯場から転じた人物がいたとすれば、理解しやすい現象ではないかと思われる。

おわりに

仁清の御室焼の中に、瀬戸系と中国華南三彩系の作陶技術の複合が認められることについては、既に別の機会に述べたことがある^⑫が、今回紹介した京博陶片の茶入からは、さらに唐津・上野・高取といった北部九州の窯場からの技術導入が想定された。こうした第三の技術系譜の存在については、金や赤の釉上彩（色絵）の存在から、おぼろげながら推測してきたことでもあり、技術的な起源と目

される北部九州を肥前にまで絞り込むことができれば、金彩や色絵の赤と一体的な技術としての導入を考えてもよいかもしれない。ただ、今回提示した根拠だけでそこまで論ずることは、いささか時期尚早の感もあり、ここでは今後に残された課題であることを述べておくにとどめたい。

以上、左回転で成形（水挽き）された御室焼茶入の存在に着目して検討を進めてきたが、改めて第1・2表を見比べて気付くことは、以前から存在が知られていた陶片（東博・根津・蜷川）の中に、成形（水挽き）はもろろんのこと、左回転で糸切りされているものが全く見受けられないことである。採集時の詳細な情報を欠いているため、確かなことは判らないものの、採集者や採集時期の違いによる内容の相違には、不良品廃棄場所としての物原の中に含まれている遺物の偏りを示しているのではないかと思われる。したがって、今後さらに仁清の御室焼の研究を進めてゆくには、現時点で実見しうる限りの御室窯跡出土陶片の情報を、極力集積することが重要であるとの思いを強くしている。

本稿執筆の前提となる調査に際して、各所蔵機関から格別の御高配を賜り、また多くの方々から懇切なる御教示を頂戴した。文末ではあるが、芳名を記して深謝の意を表わしたい。

赤沼多佳・今井敦・梶山博史・川口直宜・下村奈穂子・西田宏子・西村徳泉・長谷川祥子・森奥安吉・森下愛子・山田正樹・横山梓・静嘉堂文庫美術館・泉屋博古館分館・東京国立博物館・根津美術館（個人・機関、五〇音順）

- 1 大正七年（一九一八）に好陶會から発行された真清水蔵六（二代）の著書『陶寄』には、「〇仁清窯跡の地 現今京都市下京區室町通蛸薬師奥村延治郎の所有にかゝる御室別荘なる京都府葛野郡花園村字御室堅町十三番地十四番地十五番地を一圓とし別荘となる其地一圓に陶器の破片發掘せり奥村氏の取調べに依れば其十四番地が仁清の住宅と定まり窯地を定めるに予と奥村氏立合確實なる證據物發見の上十四番地の東端部なりとし標を陶として建つことに決す」とあるが、現在右京区御室堅町に建てられているのは花崗岩製の石標であり、この記述との間には齟齬がある。しかし、南面に大正四年（一九一五）十一月建立の旨が記されているので、蔵六らは計画を変更して石標を建てたと考えられる。
- 2 赤沼多佳「御室窯跡出土の陶片について」『東洋陶磁』第四号 東洋陶磁学会 一九七七年。
- 3 これは、収納箱の蓋裏に保管者として氏の名前が墨書されていることから裏付けられる。
- 4 梶山博史「御室焼唐物数茶入をめぐる考察」『東洋陶磁』第三十三号 東洋陶磁学会 二〇〇四年。
- 5 佐藤雅彦「京焼」（『日本の美術』第28号） 至文堂 一九六八年、鈴木裕子「仁清窯址と採集陶片について」『鑑賞シリーズ7 仁清の茶碗』根津美術館 二〇〇四年、前掲註4 梶山論文など。
- 6 同じような方法で採集されたとみられる東博陶片については、永楽和全の窯での焼成品の混入が指摘されている（前掲註2 赤沼論文）。
- 7 この事実、京博陶片が採集時の姿を必ずしもとどめておらず、古美術市場を経由する過程で選別されている蓋然性の高さを示している。
- 8 この他に、西村徳泉氏採集の陶片についても実見させていただいた。詳細については調査途上であり、他の陶片と同じ水準での調査作成を行っていないため一覽表には掲載していないが、現時点では左回転で成形（水挽き）されている茶入の存在を確認していない。また、前掲註2 赤沼論文では東博陶片を二二〇片としているが、後に接合可能な陶片を繋ぎ合わせているらしく、筆者らが調査した際には総数二〇六

- 片（接合後）となっていた。
- 9 津田武徳「ロクロの回転方向から見た近世陶磁」『大阪市文化財論集』
大阪市文化財協会 一九九四年。
- 10 尾崎直人「高取焼茶入編年試論―出土陶片を中心に―」『美術史』第
百二十五冊 美術史学会 一九八九年。
- 11 これまでにロクロの回転方向についての詳細な観察（調書の作成）を
行った御室窯跡出土陶片は、京博陶片一四八片のほかに、東博陶片二
〇六片・根津陶片一六片・蜷川陶片四片の合計三七四片である。
- 12 尾野善裕「仁清・乾山の陶法系譜について」『文部科学省科学研究費
補助金 特定領域研究A 我が国科学技術黎明期資料の体系化に関する
調査・研究 江戸のモノづくり A02 器物、文献資料の横断的基盤整
備 公募研究』『江戸時代京焼の技術基盤に関する調査・研究』成果報
告書』二〇〇六年。
- 13 前掲註12に同じ。

胎土	胎土色調	胎土備考	水挽	糸切	削り	目跡	技法の特徴	印銘	備考
密	7.5YR4/2		右						
密	2.5Y7/1 表面 10YR4/2		左	左					
密	10YR5/1		右	不明	右				
密	10YR6/1 表面 10YR5/1		左	左					
並	5YR4/1	混ぜ土的	右						
並	10YR7/1 表面 10YR6/1	混ぜ土的	右	左					細かな火膨れ
並	7.5YR5/3	混ぜ土的	右						
並	10YR4/1	混ぜ土的	右	左					
やや密	2.5Y6/2		不明						
やや密	5Y7/2		右	右			胴部上半に斜格子刻文		
やや密	5YR7/2		右						
やや密	2.5Y7/2 表面 2.5YR5/1		右						
やや密	10YR7/1		不明						
やや密	2.5Y7/2		不明						
やや密	2.5Y6/2		右						
やや密	2.5Y7/2		右	左				篋彫「一」	
やや密	2.5Y6/2		右						
やや密	2.5Y6/2		右						
やや密	2.5Y6/2		右	右					
並	2.5Y7/3	混ぜ土的	右						
並	2.5Y6/3	混ぜ土的	右						
並	10YR6/1 表面 10YR8/3	混ぜ土的	右						
並	10YR3/2	混ぜ土的	右						
並	2.5Y6/2	混ぜ土的	右						
並	2.5Y6/2	混ぜ土的	右						
並	10YR7/4	混ぜ土的	右						
並	2.5Y7/2	混ぜ土的	右	右					
やや粗	2.5Y8/4		不明						
粗	10YR4/1 表面 10YR7/4	混ぜ土	右						
やや密	5Y7/1		右						
やや密	2.5Y8/2		右	右			底裏脇まで外ゴテ		
やや密	2.5Y7/2		右						
やや粗	2.5Y8/1		右						
やや粗	2.5Y8/2		右	右					
やや粗	5Y8/1		右	右				蘭印	

表1 御室仁清窯跡出土茶入陶片（京博陶片）観察表

区分	番号	調査No.	器形	口径	胴径	底径	器高	釉種	釉色調	施釉部位	釉備考
京博	001	140	茶入					鉄釉	7.5YR3/4	内面露胎	釉色にムラ
京博	002	078	茶入 円座			3.8		鉄釉	7.5YR2/2	内面・底裏周辺露胎	
京博	003	066	茶入			2.6		鉄釉・錆釉	7.5YR4/3	内面露胎・ 底裏周辺錆化粧	
京博	004	072	茶入			2.8		鉄釉	10YR1.7/1	内面・底裏周辺露胎	
京博	005	147	茶入					鉄釉+降灰	鉄釉:7.5YR3/3 灰釉:7.5YR1.7/1	内面・底裏周辺露胎	釉色にムラ
京博	006	065	茶入			3.0		鉄釉	10YR1.7/1	内面・底裏周辺露胎	釉色にムラ
京博	007	148	茶入					鉄釉	5YR4/3	内面・底裏周辺露胎	
京博	008	070	茶入			2.9		鉄釉	7.5YR4/3	内面・底裏周辺露胎	釉色にムラ
京博	009	142	茶入	4.6				鉄釉	7.5YR2/3	残存部全面施釉	釉層にムラ
京博	010	069	茶入 肩衝			2.4		鉄釉+灰釉	鉄釉:7.5YR3/4 灰釉:10YR2/1	内面・底裏周辺露胎	
京博	011	079	茶入 肩衝	2.6				鉄釉+灰釉	鉄釉:10YR3/4 灰釉:10YR2/2	口縁を除く内面露胎	
京博	012	075	茶入 肩衝					鉄釉	7.5YR4/3	口縁を除く内面露胎	釉色にムラ
京博	013	077	茶入	5.7				鉄釉+灰釉	鉄釉:7.5YR4/3 灰釉:7.5YR2/1	残存部総釉	
京博	014	146	茶入					鉄釉・灰釉	鉄釉:7.5YR3/3 灰釉:5Y5/3	内面下半露胎	
京博	015	141	茶入					鉄釉	10YR3/3	内面・底裏周辺露胎	釉層やや薄い
京博	016	073	茶入			2.6		鉄釉	10YR2/1	内面・底裏周辺露胎	釉色にムラ
京博	017	145	茶入					鉄釉+灰釉+白釉	鉄釉:10YR2/2 灰釉:10YR1.7/1	内面露胎	
京博	018	136	茶入					鉄釉+降灰	7.5YR1.7/1	内面・底裏周辺露胎	釉色にムラ
京博	019	131	茶入			2.9		鉄釉	2.5YR2/1	内面・底裏周辺露胎	
京博	020	064	茶入 肩衝	3.8				鉄釉	7.5YR4/3	口縁を除く内面露胎	釉色にムラ
京博	021	139	茶入 瓢箪	2.7				鉄釉	7.5YR2/2	口縁を除く内面露胎	
京博	022	068	茶入 肩衝	2.6				鉄釉	10YR2/1	口縁を除く内面露胎	釉層にムラ部分的 にカセ
京博	023	134	茶入					鉄釉	5YR4/3	内面・底裏周辺露胎	
京博	024	149	茶入 耳付					鉄釉+降灰	鉄釉:7.5YR1.7/1 灰釉:7.5YR3/4	内面露胎	
京博	025	138	茶入					鉄釉+灰釉	鉄釉:7.5YR3/3 灰釉:7.5YR1.7/1	内面露胎	
京博	026	137	茶入					鉄釉	10YR3/3	内面・底裏周辺露胎	釉色にムラ
京博	027	076	茶入			2.5		降灰（焼締）	5Y6/3	降灰のみ	釉色にムラ
京博	028	143	茶入					鉄釉+灰釉	鉄釉:10YR5/2 灰釉:2.5Y7/4	残存部全面施釉	釉にカセ
京博	029	067 133	茶入 肩衝	3.1				鉄釉	10YR3/3	口縁を除く内面 底裏周辺露胎	
京博	030	135	茶入					鉄釉	7.5YR4/4	内面・底裏周辺露胎	
京博	031	132	茶入			3.0		(素焼)			
京博	032	144	茶入					鉄釉	7.5YR2/2	内面・底裏周辺露胎	釉色にムラ
京博	033	074	茶入 肩衝	3.0				鉄釉	2.5YR3/4	残存部全面施釉	釉色にムラ釉発泡
京博	034	107	茶入			3.3		鉄釉	10YR1.7/1	内面・底裏周辺露胎	釉際に指痕跡
京博	035	071	茶入			3.3		鉄釉	10YR3/4	内面・底裏周辺露胎	

* 釉色調と胎土色調は『新版標準土色帖2008年版』を用いて、修正Munsell表色系で表示した（表2・3も同じ）

胎土	胎土色調	胎土備考	水挽	糸切	削り	目跡	技法の特徴	印銘	備考
やや密	2.5Y7/2	混ぜ土的	右	右			底裏脇まで外ゴテ	小印	
やや密	10YR6/2		右						内面に火膨れ
やや密	2.5Y6/2	白斑あり	右				水挽き後瓜割形に変形		
やや密	10YR7/2		右	右				繭印	内面に火膨れ
やや密	2.5YR7/3	混ぜ土的	右	右				小印	内面に火膨れ
並	7.5YR8/4		右						
並	2.5Y8/1		右	右				小印	
やや密	10YR7/2	混ぜ土的	右	右				小判形小印	
やや密	2.5Y8/2		右	右				小判形小印	
やや密	10YR6/1		右	右		輪ドチ痕	底裏脇まで外ゴテ	小印	
やや密	2.5Y6/2		右	右				小印	内面に火膨れ
やや密	10YR7/2		右	右			底裏脇まで外ゴテ	小印	
並	2.5Y8/1	混ぜ土的	右	右				繭印カ	内面に火膨れ
やや密	10YR4/1	混ぜ土的	右	右			底裏脇まで外ゴテ	小印	
並	2.5Y7/2		右	右			底裏脇まで外ゴテ	幕印	内面に火膨れ
密	2.5Y8/2		右						
並	2.5YR4/2	石英粒多く含む	右	不明	右		底裏脇まで外ゴテ	小印	
密	2.5Y8/ 2		右						
やや密	10YR7/2		右	右				繭印	
やや密	10YR6/2	混ぜ土的	右	右				小印	
やや密	7.5YR6/2	混ぜ土的	右	右			底裏脇まで外ゴテ胴部に意図的ロクロ目	幕印	内面に火膨れ
やや密	10YR7/2	混ぜ土的	右	右			底裏脇まで外ゴテ	小印	
やや密	2.5Y7/1	混ぜ土的	右	右			底裏脇まで外ゴテ	繭印	
やや密	2.5Y7/2		右	右				繭印	
やや密	2.5Y7/2		右	右				小判形小印	
やや密	2.5Y7/1		右	右		輪ドチ痕	胴部に縦の窠目	小印	
やや密	2.5Y6/1		右	右				小判形小印	

胎土	胎土色調	胎土備考	水挽	糸切	削り	目跡	技法の特徴	印銘	備考
やや密	10YR6/1		右	左			底裏脇まで外ゴテ	繭印	底裏亀裂に釉
やや密	7.5YR7/1		右	左				繭印（右）	
やや密	7.5YR6/1		右	左			底裏脇まで外ゴテ	繭印 印「□」	
やや密	2.5Y7/2		右	左			底裏脇まで外ゴテ	繭印（右）	播座部分に透明釉
密	10YR6/2		右	左				繭印（右）	金継ぎ補修
やや密	2.5Y6/2	混ぜ土	右	左			底裏脇まで外ゴテ 水挽き後瓜割形に変形	繭印 窠彫「ハ」	
やや密	5Y7/1		右	左			底裏脇まで外ゴテ	繭印（右）	
やや密	10YR7/1		右	左			底裏脇まで外ゴテ	繭印（右）	
密	7.5YR7/1		右	へげ底				繭印	
密	2.5Y7/2		右	左				繭印カ	

表2 御室仁清窯跡出土茶入陶片（東博・根津・蜷川陶片）観察表

区分	番号	調査No	器形	口径	胴径	底径	器高	釉種	釉色調	施釉部位	釉備考
東博	001	001	茶入			3.0		鉄釉＋降灰カ	5YR3/4 黒	内面・底裏周辺露胎	
東博	002	002	茶入 肩衝	2.9				鉄釉＋降灰カ	7.5YR3/4 黒	内面下半露胎	釉色にムラ
東博	003	003	茶入 阿古陀	3.0				鉄釉＋降灰カ	5YR4/3 黒	内面下半・ 底裏周辺露胎	釉色にムラ
東博	004	004	茶入			2.4		鉄釉	5YR4/4 均一	内面・底裏周辺露胎	釉際に指痕跡
東博	005	005	茶入			2.6		鉄釉＋降灰カ	7.5YR3/3 黒	内面・底裏周辺露胎	
東博	006	006	茶入 肩衝	3.6				内面：銹釉 外面：鉄釉	銹釉：7.5YR3/1 鉄釉：5YR4/4	残存部総釉	釉発泡
東博	007	007	茶入			3.7		灰釉	2.5Y8/2	内面・底裏周辺露胎	内面に釉タレ
東博	008	008	茶入			2.9		鉄釉	5YR3/4	内面・底裏周辺露胎	内面に釉タレ
東博	009	009	茶入			2.8		鉄釉	5YR4/4	内面・底裏周辺露胎	
東博	010	010	茶入 肩衝			3.1		鉄釉＋降灰カ	5YR3/4 黒	内面・底裏周辺露胎	釉色にムラ
東博	011	011	茶入			3.0		鉄釉＋降灰カ	5YR3/3 黒	内面・底裏周辺露胎	釉色にムラ
東博	012	012	茶入			2.5		鉄釉	10YR4/4	残存部ぼろ露胎	斑点状に釉
東博	013	013	茶入			2.8		鉄釉＋降灰カ	7.5YR3/3 黒	内面・底裏周辺露胎	釉際に指痕跡釉色 にムラ
東博	014	014	茶入			2.4		鉄釉	7.5YR2/2	内面・底裏周辺露胎	釉際に指痕跡
東博	015	015	茶入			2.4		(残存部露胎)		残存部露胎	
東博	016	017	茶入 肩衝	3.1				鉄釉	7.5YR3/4	内面露胎	内面に釉タレ
東博	017	018	茶入			3.2		鉄釉	5YR2/3	内面・底裏周辺露胎	釉層やや薄い
東博	018	019	茶入 肩衝	2.7				鉄釉	10YR2/1	内面下半露胎	
東博	019	020	茶入 鶴首			3.2		鉄釉	7.5YR3/4	内面下半・ 底裏周辺露胎	釉際に指痕跡
根津	001	015	茶入			2.3		鉄釉	5YR4/3	内面・底裏周辺露胎	
根津	002	017	茶入			2.8		鉄釉	5YR3/4	内面・底裏周辺露胎	
根津	003	018	茶入			2.6		鉄釉	鉄釉：5YR3/4	内面・底裏周辺露胎	
根津	004	019	茶入			3.1		鉄釉＋降灰	鉄釉：5YR3/2 灰釉：2.5Y7/2	内面・底裏周辺露胎	内面に釉タレ
蜷川	001	001	茶入			3.0		鉄釉	10YR3/2	内面・底裏周辺露胎	
蜷川	002	002	茶入			2.9		鉄釉	10YR3/4	内面・底裏周辺露胎	
蜷川	003	003	茶入			4.1		鉄釉	10YR3/4	内面・底裏周辺露胎	
蜷川	004	004	茶入			2.9		鉄釉	黒	内面・底裏周辺露胎	

表3 伝世御室焼唐物写し茶入観察表

区分	番号	調査No	器形	口径	胴径	底径	器高	釉種	釉色調	施釉部位	釉備考
根津	001	084	茶入 蹲	3.1	6.1	2.9	6.9	鉄釉＋灰釉	7.5YR3/2	内面下半・ 底裏周辺露胎	釉際に指痕跡降灰 あり
根津	002	088	茶入 驢蹄口	3.1	6.8	2.6	4.6	鉄釉＋灰釉	7.5YR4/4	口縁を除く内面・ 底裏周辺露胎	釉際に指痕跡
根津	003	090	茶入 振出口	3.0	7.1	3.4	4.9	鉄釉＋灰釉	10YR3/3	口縁を除く内面・ 底裏周辺露胎	
根津	004	085	茶入 播座	3.7	6.5	3.3	6.0	鉄釉	10YR4/4	外面露胎	外面に鉄絵
根津	005	087	茶入 皆口	6.6	7.4	3.0	4.3	鉄釉＋灰釉	5YR4/3	内面下半・ 底裏周辺露胎	釉際に指痕跡
根津	006	089	茶入 阿古陀	3.1	6.8	2.6	6.4	鉄釉＋灰釉	7.5YR4/4	口縁を除く内面・ 底裏周辺露胎	釉際に指痕跡
根津	007	086	茶入 手瓶	4.8	5.8	3.5	6.6	鉄釉・灰釉	5YR3/4	口縁を除く内面・ 底裏周辺露胎	釉際に指痕跡
根津	008	083	茶入 瓢箪	2.9	6.1	2.9	6.8	鉄釉＋灰釉	2.5YR3/2 ~ 3/3	口縁を除く内面・ 底裏周辺露胎	
泉屋	001		茶入 肩衝	4.3	6.9	4.3	7.8	鉄釉＋灰釉	鉄釉：5YR3/3 灰釉：5YR2/1	内面下半・ 底裏周辺露胎	釉際に指痕跡
泉屋	002		茶入 驢蹄	3.2	6.6	2.7	6.0	鉄釉	10YR2/1	口縁を除く内面・ 底裏周辺露胎	釉際に指痕跡

胎土	胎土色調	胎土備考	水挽	糸切	削り	目跡	技法の特徴	印銘	備考
やや密	2.5Y7/2		右	左			糸切り失敗、切り直し	蒨印	
やや密	2.5Y7/3		右	左				蒨印（右）	
密	5Y7/1		右	左				蒨印（右）	
やや密	2.5Y7/3		右	左				蒨印（右）	
密	2.5Y7/2		右	左				蒨印（右）	
密	2.5Y7/2		右	左			底裏脇まで外ゴテ	蒨印（右）	
密	2.5Y4/2		右	左	右			無	
やや密	2.5Y7/1		右	左				蒨印（右）	
密	2.5Y7/2		右	左				蒨印（右）	
密	5Y7/1		右	左			底裏脇まで外ゴテ	蒨印（右）	
密	5Y7/1		右	左				蒨印（右）	
やや密	2.5Y7/2		右	左			底裏脇まで外ゴテ	蒨印（右）	
やや密	2.5Y7/2		右	左			底裏脇まで外ゴテ	蒨印（右）	
やや密	2.5Y7/1		右	左				蒨印（右）	
やや密	2.5Y7/2		右	左				蒨印（右）	
密	2.5Y7/2		右	左			底裏脇まで外ゴテ	蒨印（右）	
密	2.5Y7/2		右	左			底裏脇まで外ゴテ	蒨印（右）	
密	2.5Y5/1		右	左				小印	
密	5Y6/1		右	左				小印	
密	5Y6/2		右	左				小印	
やや粗	5Y6/2		右	左				小印（右）	
並	10YR5/2	混ぜ土	右	へげ底				小印	
やや密	10YR5/3	混ぜ土的	右	左				小印	
密	7.5YR5/4		右	左				蒨印	
密	2.5Y7/2		右	左				無	
やや密	10YR6/2	混ぜ土的	右	左				蒨印	
やや密	10YR6/2	混ぜ土的	右	左				蒨印	
やや密	2.5Y6/2	混ぜ土	右	左			水挽き後瓜割形に変形	蒨印	
並	10YR6/3		右	左				無	
やや密	10YR5/2	混ぜ土	右	左				小印	
やや密	7.5YR6/2	混ぜ土	右	左				小印	
並	10YR6/3	石英粒多く含む	右	右				小印	
やや密	2.5Y6/2	混ぜ土	左	左				蒨印	
並	10YR6/2	混ぜ土	右	へげ底				蒨印	
並	2.5Y7/3	混ぜ土的	右	左				小印	

区分	番号	調査No.	器形	口径	胴径	底径	器高	釉種	釉色調	施釉部位	釉備考
泉屋	003		茶入 南瓜	2.7	6.8	2.5	6.2	鉄釉	5YR3/2 ~ 2.5YR1.7/1	口縁を除く内面・底裏周辺露胎	釉色にムラ
泉屋	004		茶入 餌籠	2.7	6.6	2.7	6.8	鉄釉	5YR2/2	口縁を除く内面・底裏周辺露胎	釉際に指痕跡
泉屋	005		茶入 鶴首	3.5	6.4	4.0	8.0	鉄釉+灰釉	鉄釉:5YR3/3 灰釉:10YR1.7/1	内面下半・底裏周辺露胎	
泉屋	006		茶入 平肩衝	3.6	7.6	4.3	5.8	鉄釉+灰釉	鉄釉:7.5YR2/3 灰釉:10YR5/3	口縁を除く内面・底裏周辺露胎	
泉屋	007		茶入 大海	7.4	8.0	3.8	5.0	鉄釉+灰釉	鉄釉:5YR3/3 灰釉:10YR1.7/1	口縁を除く内面・底裏周辺露胎	
泉屋	008		茶入 水滴	3.3	6.6	3.5	7.4	鉄釉+灰釉	鉄釉:7.5YR4/2 灰釉:10YR2/1	口縁を除く内面・底裏周辺露胎	
泉屋	009		茶入 文琳	2.9	7.1	2.7	7.0	鉄釉+灰釉	鉄釉:7.5YR3/2 灰釉:7.5YR5/3	口縁を除く内面・底裏周辺露胎	
泉屋	010		茶入 茄子	3.1	6.5	3.0	5.8	鉄釉	2.5YR3/1	口縁を除く内面・底裏周辺露胎	釉際に指痕跡
泉屋	011		茶入 樽	2.8	5.8	2.4	6.5	鉄釉	2.5YR1.7/1 ~ 5YR3/3	口縁を除く内面・底裏周辺露胎	釉色にムラ
泉屋	012		茶入 瓶子	2.8	6.2	3.3	8.8	鉄釉+灰釉	鉄釉:5YR4/2 灰釉:5YR2/1	口縁を除く内面・底裏周辺露胎	
泉屋	013		茶入 内海	3.1	6.5	2.2	4.3	鉄釉+灰釉	鉄釉:7.5YR3/3 灰釉:7.5YR2/1	口縁を除く内面・底裏周辺露胎	釉際に指痕跡
泉屋	014		茶入 芋の子	3.0	5.8	2.5	6.6	鉄釉+灰釉	鉄釉:5YR1.7/1 灰釉:5YR1.7/1	口縁を除く内面・底裏周辺露胎	釉際に指痕跡
泉屋	015		茶入 円座文琳	2.6	5.7	3.0	7.5	鉄釉	5YR3/1 ~ 5YR3/3	口縁を除く内面・底裏周辺露胎	釉色にムラ
泉屋	016		茶入 丸壺	3.1	6.3	2.7	6.1	鉄釉+灰釉	鉄釉:5YR3/3 灰釉:5YR3/1	口縁を除く内面・底裏周辺露胎	釉際に指痕跡
泉屋	017		茶入 瓢箪	2.7	5.8	3.3	6.6	鉄釉	2.5YR2/2	口縁を除く内面・底裏周辺露胎	
泉屋	018		茶入 手瓶	4.1	5.2	3.0	7.1	鉄釉	5YR3/2	口縁を除く内面・底裏周辺露胎	釉際に指痕跡釉色にムラ
泉屋	019		茶入 常陸帯	2.5	5.3	2.6	8.1	鉄釉	5YR3/2	口縁を除く内面・底裏周辺露胎	釉層にムラ
静嘉堂	001		茶入 茄子	2.5	6.6	2.5	6.0	鉄釉	5YR3/3	内面下半・底裏周辺露胎	釉際に指痕跡
静嘉堂	002		茶入 文琳	2.8	7.0	2.5	6.4	鉄釉	鉄釉:7.5YR3/3 灰釉:2.5YR1.7/1	内面・底裏周辺露胎	釉際に指痕跡
静嘉堂	003		茶入 餌籠	3.0	7.0	3.4	4.9	鉄釉+灰釉	鉄釉:5YR3/9 灰釉:5YR1.7/1	内面・底裏周辺露胎	釉際に指痕跡
静嘉堂	004		茶入 丸壺	3.2	7.0	3.1	6.1	鉄釉+灰釉	鉄釉:7.5YR3/4 灰釉:7.5YR1.7/1	内面・底裏周辺露胎	釉際に指痕跡
静嘉堂	005		茶入 湯桶	7.8	8.6	4.5	7.5	鉄釉+灰釉	鉄釉:5YR4/3 灰釉:5YR2/3	内面・底裏周辺露胎	釉際に指痕跡
静嘉堂	006		茶入 柿	3.5	7.1	2.9	5.0	鉄釉+灰釉	鉄釉:7.5YR3/3 灰釉:7.5YR1.7/1	内面・底裏周辺露胎	釉際に指痕跡
静嘉堂	007		茶入 播座	3.8	6.3	3.3	5.4	鉄釉	5YR2/4	外面露胎	
静嘉堂	008		茶入 大海	5.2	7.7	3.3	4.8	鉄釉+灰釉	鉄釉:5YR3/4 灰釉:5YR1.7/1	内面・底裏周辺露胎	釉際に指痕跡
静嘉堂	009		茶入 飯桶	6.8	7.2	3.2	4.4	鉄釉	2.5YR2/1	内面下半・底裏周辺露胎	釉際に指痕跡
静嘉堂	010		茶入 尊	2.8	6.0	3.1	8.9	鉄釉+灰釉	鉄釉:2.5YR4/3 灰釉:2.5YR2/1	内面下半・底裏周辺露胎	
静嘉堂	011		茶入 橘	3.1	7.2	2.8	6.8	鉄釉	5YR4/3 ~ 2/3	内面・底裏周辺露胎	釉際に指痕跡釉色にムラ
静嘉堂	012		茶入 瓢箪	2.8	6.4	2.9	7.4	鉄釉+灰釉	鉄釉:7.5YR4/4 灰釉:7.5YR1.7/1	内面・底裏周辺露胎	
静嘉堂	013		茶入 水滴	3.7	7.3	4.0	7.4	鉄釉+灰釉	鉄釉:5YR2/3 灰釉:5YR4/3	内面・底裏周辺露胎	
静嘉堂	014		茶入 驢蹄口	3.3	7.4	2.9	6.7	鉄釉+灰釉	鉄釉:7.5YR5/4 灰釉:7.5YR2/1	内面・底裏周辺露胎	釉際に指痕跡
静嘉堂	015		茶入 手瓶	4.1	6.2	3.7	6.5	鉄釉	7.5YR3/4	内面・底裏周辺露胎	釉際に指痕跡
静嘉堂	016		茶入 鶴頸	3.5	6.5	3.3	7.7	鉄釉+灰釉	鉄釉:5YR4/4 灰釉:5YR2/3	内面・底裏周辺露胎	釉際に指痕跡
静嘉堂	017		茶入 肩衝	4.0	6.8	4.0	8.1	鉄釉+灰釉	鉄釉:5YR4/4 灰釉:5YR2/3	内面・底裏周辺露胎	釉際に指痕跡
静嘉堂	018		茶入 常陸帯	2.5	4.9	2.6	7.8	鉄釉+灰釉	鉄釉:5YR4/4 灰釉:5YR1.7/1	内面・底裏周辺露胎	